

備前焼の伝統

可能性を強調

岡山で東洋陶磁学会大会

備前焼をテーマにした

「東洋陶磁学会第43回大会」が31日から2日間の日程で、岡山市北区天神町の岡山県立美術館ホールで始まった。講演や研究発表を通じて、その歴史と未来を考える。

日本をはじめ、アジア地域の陶磁器を研究する全国



の美術館や博物館の学芸員、埋蔵文化財関係者ら約70人が参加。初日は、備前

伊勢崎氏の講演などがあった「東洋陶磁学会第43回大会」岡山

焼の重要無形文化財保持者（人間国宝）の伊勢崎淳氏が講演し、中世六古窯の中で、備前焼は無釉焼き締めを守り通してきた唯一の存在であることを強調。「その伝統の中に工夫を加えていけば、新たな陶芸表現を切り開ける」と未来への可能性を示した。

このほか鎌倉時代以降の

陶片や窯跡に関する3件の研究発表もあった。2日目は、桃山備前への回帰を掲げた「中興の祖」金重陶陽（1896～1967年）の業績などの研究成果が報告される。

同学会は倉敷市出身の陶磁研究家で、陶芸家としても活躍した小山富士夫（1900～75年）が設立。大会は毎年1回開催し、岡山では39年ぶり。

（土井一義）